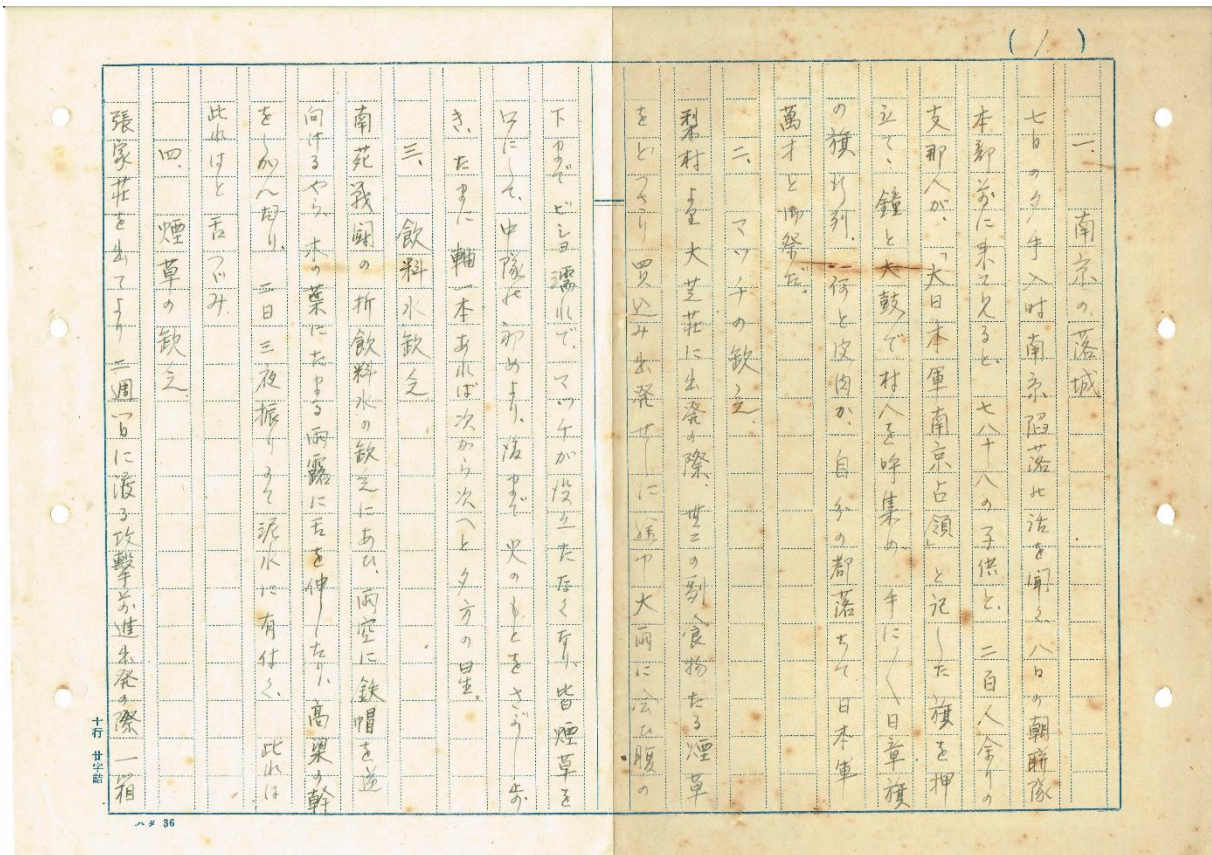


日中戦争の随想

(注) ○は判読不能文字、【 】内および□内は判読者の注記、※は引用資料に関する引用者の注釈等、[] 内は資料出所を示す。明らかな誤字・当て字等は訂正し、日記本文・引用文とも句読点および濁点を適宜加除した。



1. 南京の落城

【1937年12月】7日の夕手入時、南京陷落の話を知る。8日の朝、^連聯隊本部前に来て見ると、7・80人の子供と、2百人余りの支那人が、「大日本軍南京占領」と記した旗を押立て、鐘と太鼓で村人を呼集め、手に手に日章旗の旗行列、何と皮肉か、自分の都落ちて日本軍^万萬才と御祭だ。

2. マッチの^欠乏

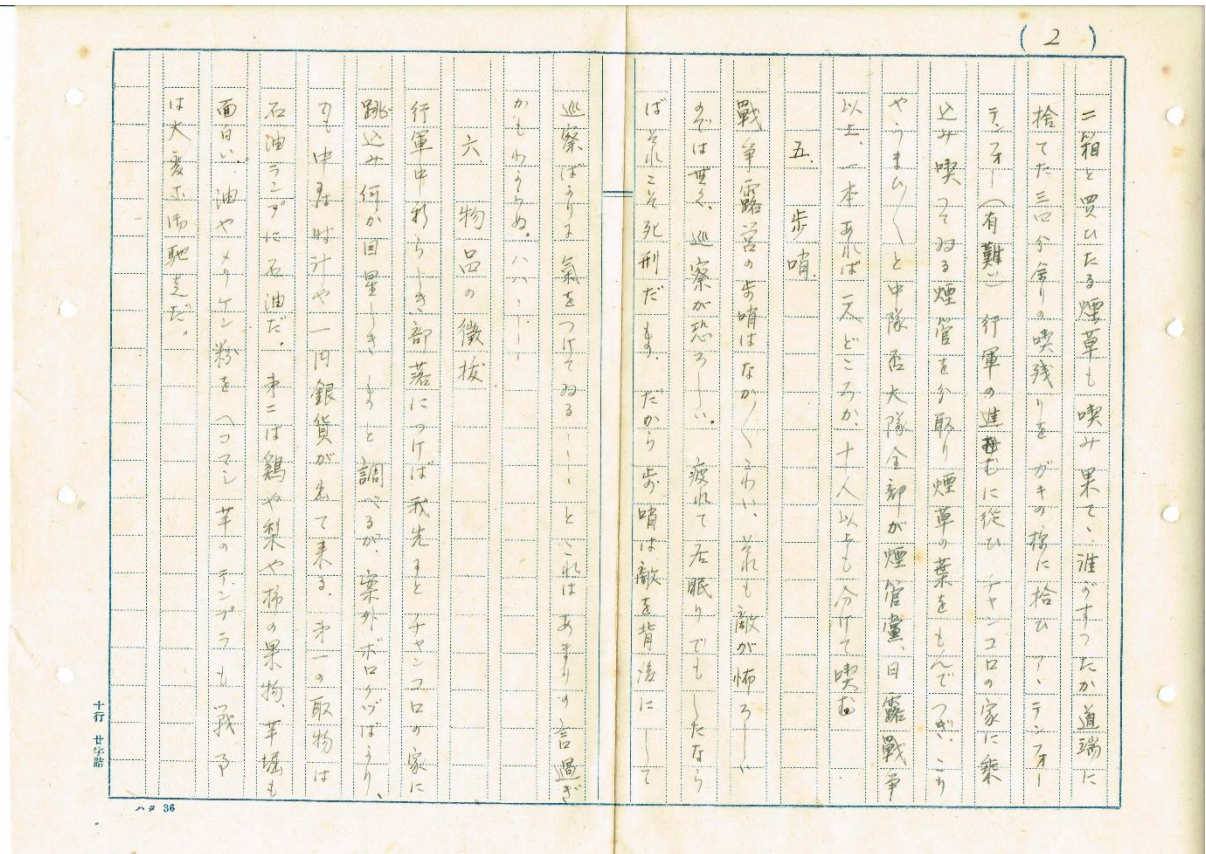
【1937年8月19日?】梨村より大芝荘に出発の際、無^二の副食物たる煙草をどっさり買込み出発せしに、途中、大雨に会ひ、腹の下までビショ濡れで、マッチが役立たなくなり、皆煙草を口にして、【先頭を行く】中隊長初めより、後まで火のもとをさがし歩き、たまに軸1本あれば、次から次へと夕方の星。

3. 飲料水^欠乏

【1937年7月28日の】^{なんえん}南苑戦闘の折、飲料水の^欠乏にあひ、雨空に鉄帽を逆向けるやら、木の葉にたまる雨露に舌を伸したり、^{こうりゃん}高粱の幹をしがんだり、2日3夜振りにて泥水に有付く。此れは此れはと舌つづみ。

4. 煙草の^欠乏

【1937年9月14日に】張家莊【張家庄?】を出てより2週間に渡る攻撃前進出発の際、1箱、



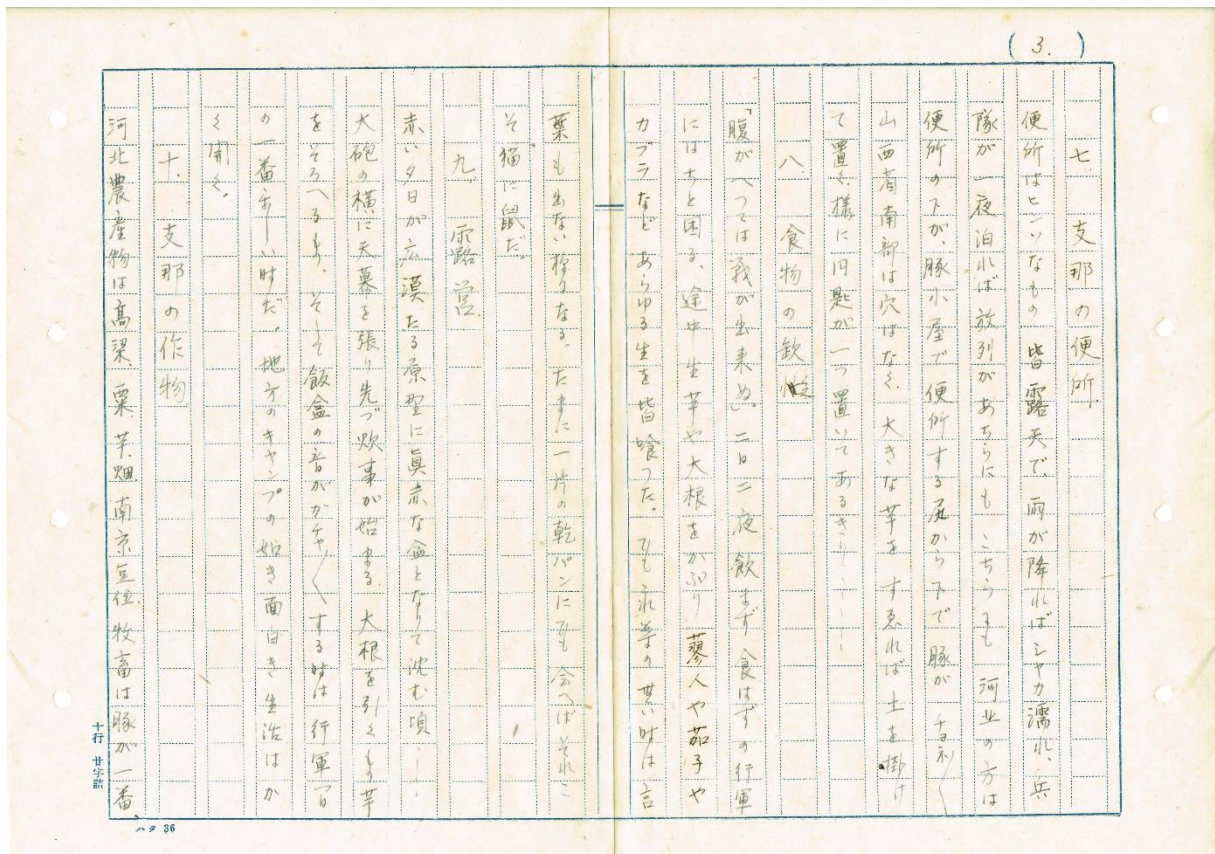
2箱と買ひたる煙草も喫み果てゝ、誰がすったか道端に捨てた3・4分余りの喫残りを、ガキの様に拾ひ、ア・テンフオー・テンフオー（有難い）【兵隊支那語で「頂好」＝最高】。行軍の進むに従ひ、チャンコロ【＝中国人の蔑称】の家に乗込み、喫てゐる煙管を分取り、煙草の葉をもんでつぎ、こりやうまひ、うまひと中隊、否、大隊全部が煙管黨、【紙巻煙草が主流になる前の】日露戦争以上、1本あれば2人どころか、10人以上も分けて喫む。

5. 歩哨

戦争露営の歩哨はなかなかこわい。それも敵が怖ろしいのでは無く、巡察が恐ろしい。疲れて居眠りでもしたならば、それこそ死刑だもの。だから歩哨は敵を背後にして、巡察ばかりに氣をつけてゐる…と、これはあまりの言過ぎかも知れぬ。ハハ…。

6. 物品の徴発

行軍中、新らしき部落につけば、我先にとチャンコロの家に跳込み、何か目星しきものと調べるが、案外ボロクズばかり、でも中には時計や1円銀貨が出て来る。第1の取物は石油ランプに石油だ。第2は鶏や、梨や柿の果物、芋堀も面白い。油やメリケン粉をヘコマシ、芋のテンプラも。戦争は大変な御馳走だ。【「Cの日記」8頁を参照】



7. 支那の便所

便所は^{貧相}ヒンソなもの、皆、露天で、雨が降ればシャカ濡れ、兵隊が一夜泊れば【大砲ならぬ、便の】放列があちらにも、こちらにも。河北の方は便所の下が豚小屋で、便所する尻から、下で豚がチョネチョネ。山西省南部は穴はなく、大きな芋をすゑれば、土を掛けて置く様に、^{えんぴ}円匙【=スコップ】が一つ置いてあるきり…。

8. 食物の^欠乏

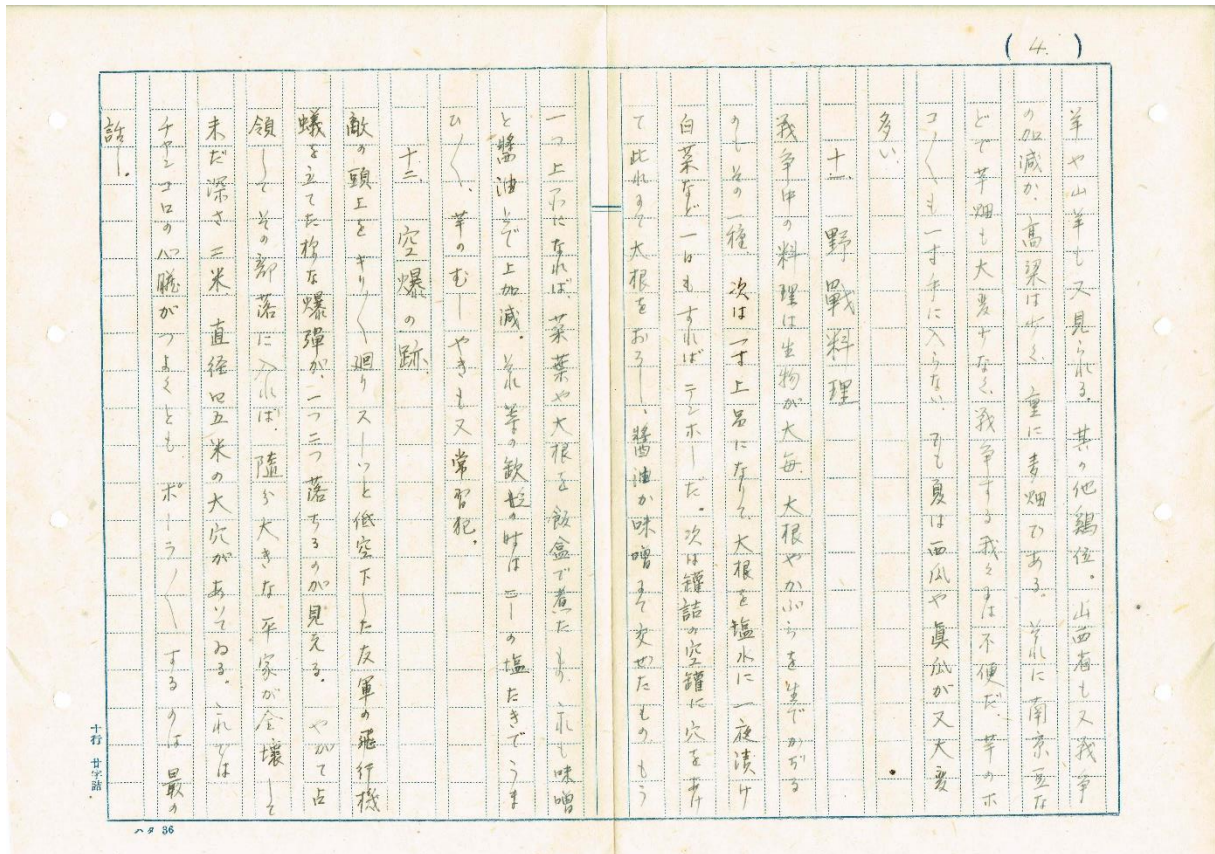
「腹がへっては戦が出来ぬ。」 2日2夜飲まず食はずの行軍にはちと困る。途中、生芋や大根をかぶり、蓼人【人參?】や茄子やカブラなど、あらゆる生を皆喰った。でも、これ等の苦い時は言葉も出ない様になる。たまに一片の乾パンにでも会へば、それこそ猫に鼠だ。

9. 露営

赤い夕日が広漠たる原野に真っ赤な盆となりて沈む頃…、大砲の横に天幕を張り、先ず炊事が始まる。大根を引くもの、芋をそろへるもの、そして^{はんごう}飯盒の音がガチャガチャする時は、行軍間の一番楽しい時だ。地方のキャンプの如き面白き生活はかく開く。

10. 支那の作物

河北農産物は^{こうりやん}高粱、粟、芋畑、南京豆位。牧畜は豚が一番、



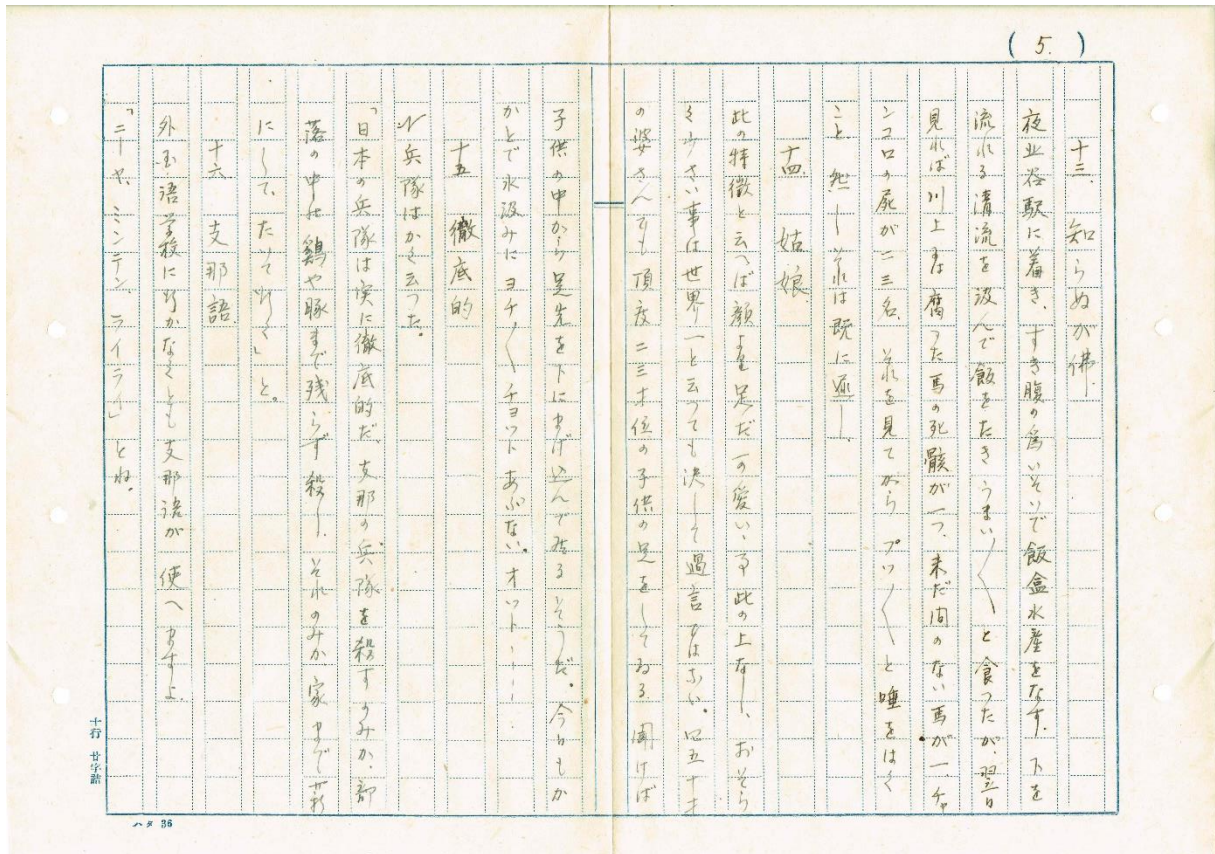
羊や山羊も又見られる。其の他、鶏位。山西省も又戦争の加減か、高粱^{こうりやん}は少く、主に麦畑である。それに南京豆などで、芋畑も大変少なく、戦争する我々には不便だ。芋のホコホコも一寸手に入らない。でも、夏は西瓜や眞瓜が又大変多い。

11. 野戦料理

戦争中の料理は生物^{なまもの}が大毎、大根やかぶらを生でかぢるのも、その一種、次は一寸上品になり、大根を塩水に一夜漬け白菜など。1日もすればテンホーだ。次は罐詰の空罐に穴をあけて、これにて大根をおろし、醤油か味噌にて交ぜたもの。もう一つ上品になれば、菜葉や大根を飯盒^{はんごう}で煮たもの。これも味噌と醤油とで上加減。それ等の^欠缺乏の時はニー【=中国人】の塩たきでうまひうまひ。芋のむしやきも又常習犯。

12. 空爆の跡

敵の頭上をキリキリ廻り、スーッと低空下した友軍の飛行機、蟻を立てた様な爆弾が、1つ2つ落ちるのが見える。やがて占領してその部落に入れば、随分大きな平家が全壊して、未だ深さ^m2米、直径^m4・5米の大穴があいてゐる。これでは、チャンコロの心臓がつよくとも、ポーラポーラするのは、^{もつとも}尤の話。



13. 知らぬが佛

夜、北谷駅に着き、すき腹の為、いそいで飯盒炊爨^{はんごうすいさん}をなす。下を流れる清流を汲んで飯をたき、うまいうまいと食ったが、翌日見れば、川上には腐った馬の死骸が1つ、未だ間のない馬が1、チャンコロの屍が2・3名、それを見てからプップッと唾をはくこと。然しそれは既に遅し。

14. クーニャン 姑娘

此の特徴と云へば顔より【纏足^{てん}した】足だ。可愛い事、此の上なし、おそらく小さい事は世界一と云っても決して過言ではない。4・5十才の婆さんでも、丁度2・3才位の子供の足^{うち}をしてゐる。聞けば子供の中から足先を下にまげ込んで居るそうだ。今日もかかどで水汲みにヨチヨチ、チョットあぶない、オット…。

15. 徹底的

N兵隊【中尾敏郎自身か?】はかく云った。「日本の兵隊は実に徹底的だ。支那の兵隊を殺すのみか、部落の中は鶏や豚まで残らず殺し、そののみか、家まで薪にして、たいて行く」と。

16. 支那語

外国語学校に行かなくとも、支那語が使へますよ。【いわゆる「兵隊支那語」で、正規の中国語ではない】「ニーヤ【=中国人】、ミンテン、ライライ」とね。

(参考) 山西省の大同の纏足女性

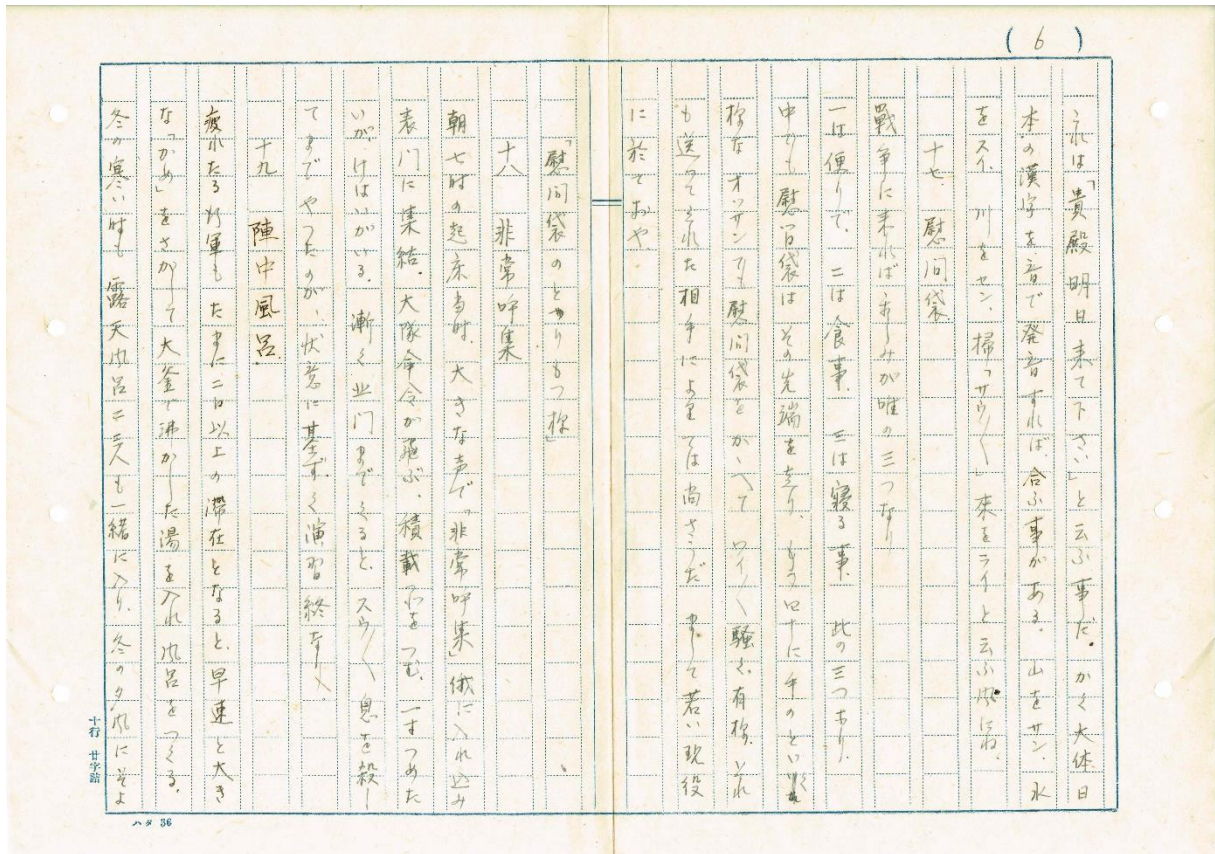


[1936~37年 亜細亜写真大観社発行

「亜細亜大観第13輯」96頁

(人間文化研究機構のwebページ所収。

ただし、FlashPlayerが必要なので現時点では閲覧不能)]



これは「貴殿、明日来て下さい」と云ふ事だ。かく大体、日本の漢字を音で発音すれば、合ふ事がある。山をサン、水をスイ、川をセン、掃「サウサウ」、來をライと云ふ風にね。

17. 慰問袋

戦争に来れば楽しみが唯の3つなり。1は便りで、2は食事、3は寝る事、此の3つなり。中でも慰問袋はその先端を走り、もう40に手のとどく様なオッサンでも、慰問袋をかゝへて、ワイワイ騒ぐ有様。それも送ってくれた相手によりては、尚さうだ。まして若い現役に於ておや。

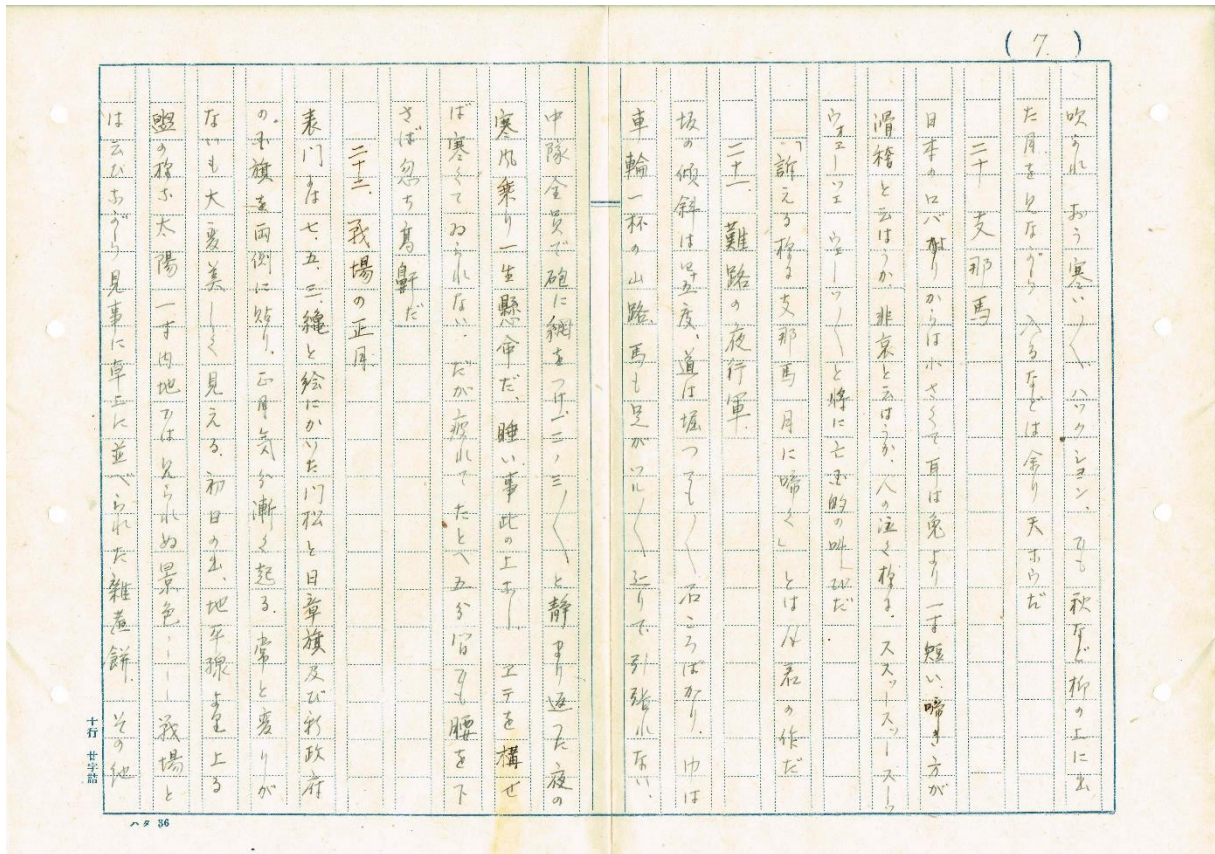
「慰問袋のとりもつ様【縁?】」

18. 非常呼集【1937年12月7日】

朝7時の起床当時、大きな声で「非常呼集」、^{にわか}俄に入れ込み、表門に集結、大隊命令が飛ぶ。積載品をつむ。^{ちよつと}一寸つめたいが、^{ようや}けはいがいる。漸く北門までくると、スウスウ息を殺してまでやったのが、状態に基ずく演習終なり。

19. 陣中風呂

疲れたる行軍も、たまに2日以上滞在となると、早速と大きな「かめ」をさがして大釜で沸かした湯を入れ、風呂をつくる。冬の寒い時も露天風呂、2・3人も一緒に入り、冬の夕風にそよ



吹かれ、おう寒い寒い、ハクション。でも秋など、柳の上に出た月を見ながら入るなどは、余
 テンホウ
 り天ホウ【兵隊支那語で「頂好」=最高】だ。

20. 支那馬

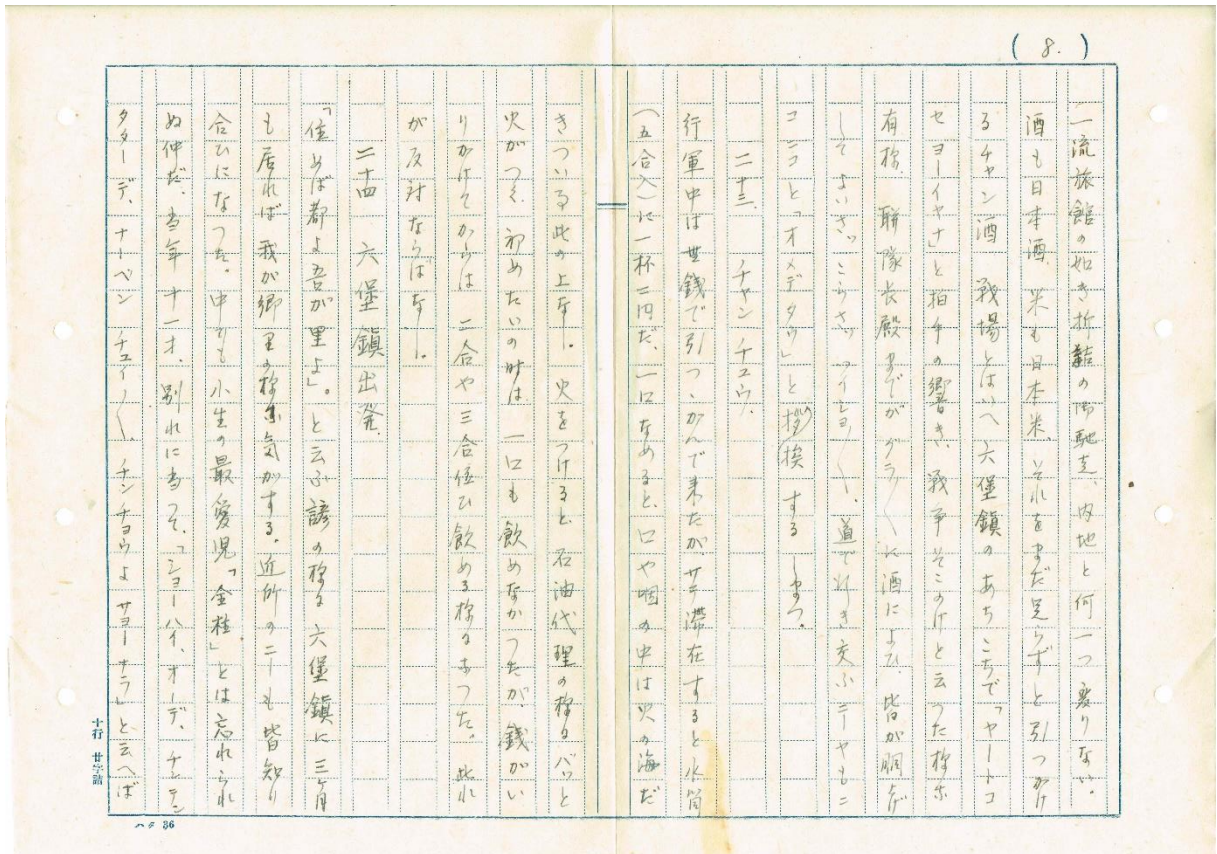
日本のロバより、からは小さくて、耳は兎より一寸短^{ちよつと}い。啼き方が滑稽と云はうか、悲哀と云は
 うか、人の泣く様な、ススーススースーツ、ウオエーツエ、ウェーツウェーツと、將に亡国的
 の叫びだ。「訴える様な支那馬、月に啼く」とはH君の作だ。

21. 難路の夜行軍

坂の傾斜は45度、道は掘っても掘っても石ころばかり、巾は車輪一杯の山路。馬も足がツルツル
 すべ
 たりて、引張れない。中隊全員で砲に綱をつけ、一・二ノ三、一・二ノ三と、静まり返った夜の
 寒風乗り一生懸命だ。眠い事此の上なし。エテ【^{得手}勝手気まま】を構^{かま}せば寒くてあられない。だが、
 疲れて、たとへ5分間でも腰を下さば、^{たちま}忽ち^{たかいびき}高軒だ。

22. 戦場の正月【1938年1月1日】

表門には七五三繩と、絵にかいた門松と日章旗及び新政府の小旗を両側に貼^{しめなわ}り、正月気分^{ようや}漸く
 起る。常と変りがないも、大変美しく見える。初日の出、地平線より上る、^{たらい}盥^{ちよつと}の様な太陽、一寸
 内地では見られぬ景色…。戦場とは云ひながら、見事に卓上に並べられた雑煮餅、その他



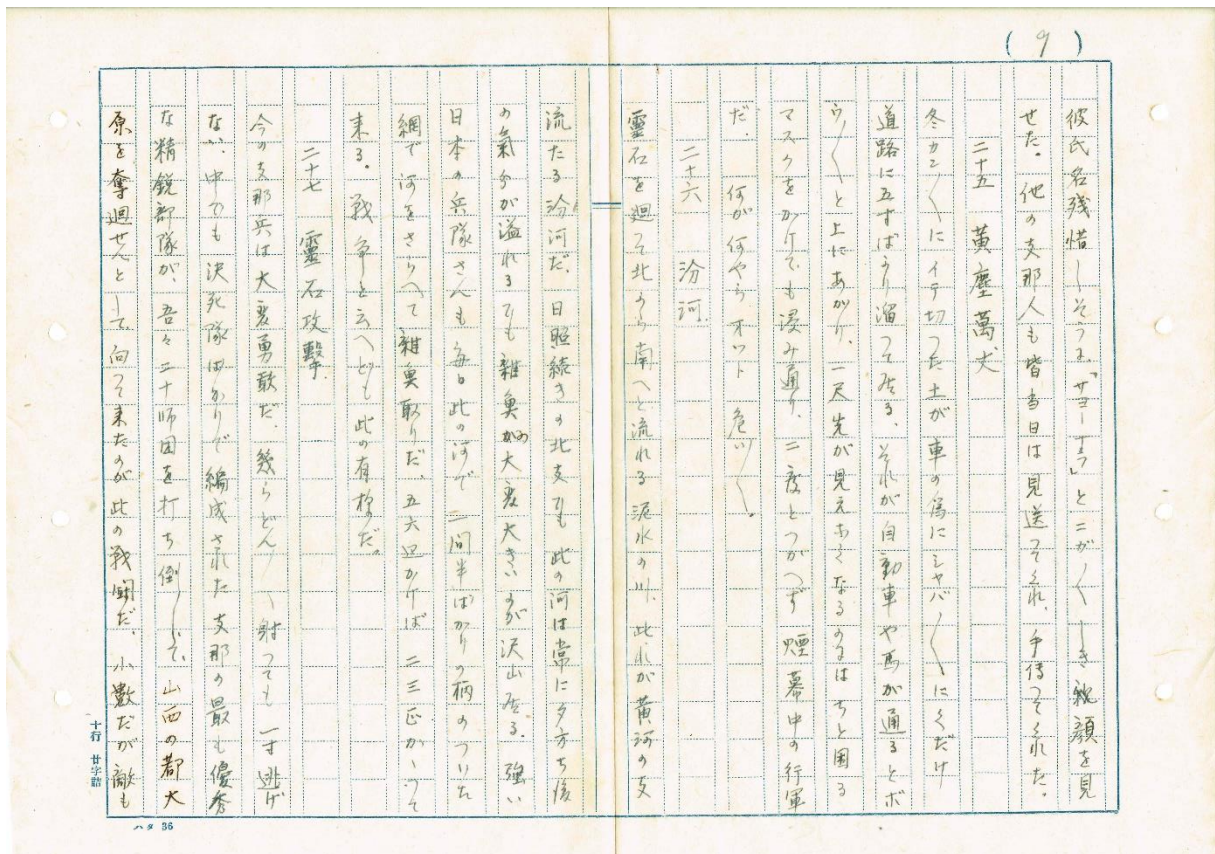
一流旅館の如き折詰の御馳走、内地と何一つ変りない。酒も日本酒、米も日本米、それをまだ足らずと引っかけのチャン^{チュウ}酒【=中国酒】、戦場とはいへ、六堡鎮のあちこちで「ヤートコセ、ヨイヤナ」と拍手の響き、戦争そのけと云った様な有様、^連聯隊長殿までがグラグラに酒によひ、皆が胴上げして、よいさっこらさっ、ワイショワイショ、道で行き交うニーヤもニコニコと「オメデタウ」と挨拶するしまつ。

23. チャンチュウ

行軍中は30銭で引っゝかんで来たが、サテ滞在すると水筒（5合入）に1杯2円だ。一口なめると、口や咽の中は火の海だ。きつい事此の上なし。火をつけると、石油代理の様にバツと火がつく。初めたいの時は1口も飲めなかったが、銭がいりかけてからは、2合や3合位ひ飲める様になった。此れが反対ならばな一。

24. 六堡鎮出發

「住めば都よ吾が里よ」と云ふ諺の様に、六堡鎮に3ヶ月も居れば、我が郷里の様な気がする。近所のニー【中国人】も皆知り合ひになった。中でも小生の最愛児「全柱」とは忘れられぬ仲だ。当年11才、【1938年2月9日の】別れに当って「ショーハイ【^小孩^子ども】、オーデ、チンテンタターデ、ナーベン、チュイチュイ、チンチョウよ、サヨーナラ」と云へば



彼氏、名残惜しそうに「サヨナラ」とニガニガしき顔を見せた。他の支那人も皆、当日は見送ってくれ、手伝ってくれた。

25. 黄塵^万萬丈

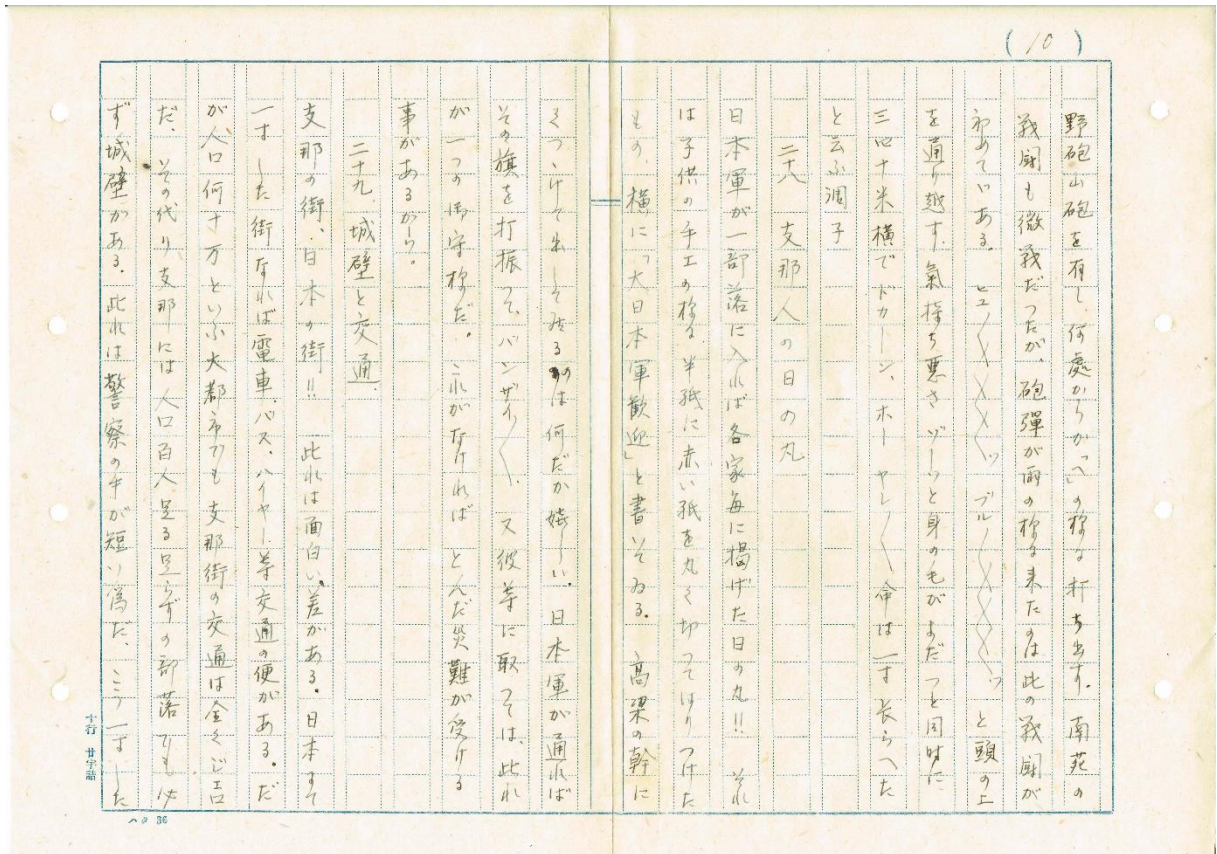
冬、カンカンにイテ切った土が車の為にシャバシャバにくだけ、道路に 5 寸ばかり溜って居る。それが自動車や馬が通るとボウボウと上にあがり、1 尺先が見えなくなるのには、ちと困る。マスクをかけても浸み通り、2 度とつかへず、煙幕中の行軍だ。何が何やら、オット危い危い。

26. 汾河 ふんが

霊石を廻って北より南へと流れる泥水の川、此れが黄河の支流たる汾河だ。日照続きの北支でも、此の河は常に夕方〇〇の気分が溢れる。でも、雑魚の大変大きいのが沢山居る。強い日本の兵隊さんも、毎日此の河で1間半ばかりの柄のついた網で、河をさらへて雑魚取りだ。5・6遍かけば、2・3匹かゝって来る。戦争と云へども此の有様だ。【「Cの日記（C-68頁）1938年3月12日を参照】

27. 靈石攻撃【1938年2月23日】

今の支那兵は大変勇敢だ。幾らどんどん射つても一寸^{ちよっと}逃げない。中でも決死隊ばかりで編成された支那の最も優秀な精鋭部隊が吾々二十師団を打ち倒して、山西の都、大原を奪廻^回せんとして向って来たのが、此の戦鬪だ。少数^数だが敵も



野砲・山砲を有し、何處^処からか「へ」の様^{尻?}に打ち出す。南苑^{なんえん}の戦闘も激戦だったが、砲弾が雨の様に來たのは、此の戦闘が始めてである。ヒュヒュヒュヒュヒュッ、ブルブルブルブルッと頭の上を通り越す。氣^き持ち悪さ、ゾーッと身の毛がよだつと同時に、3・4十^m米横でドカーン。ホー、ヤレヤレ、命^{ちよつと}は一寸長らへたと云ふ調子。

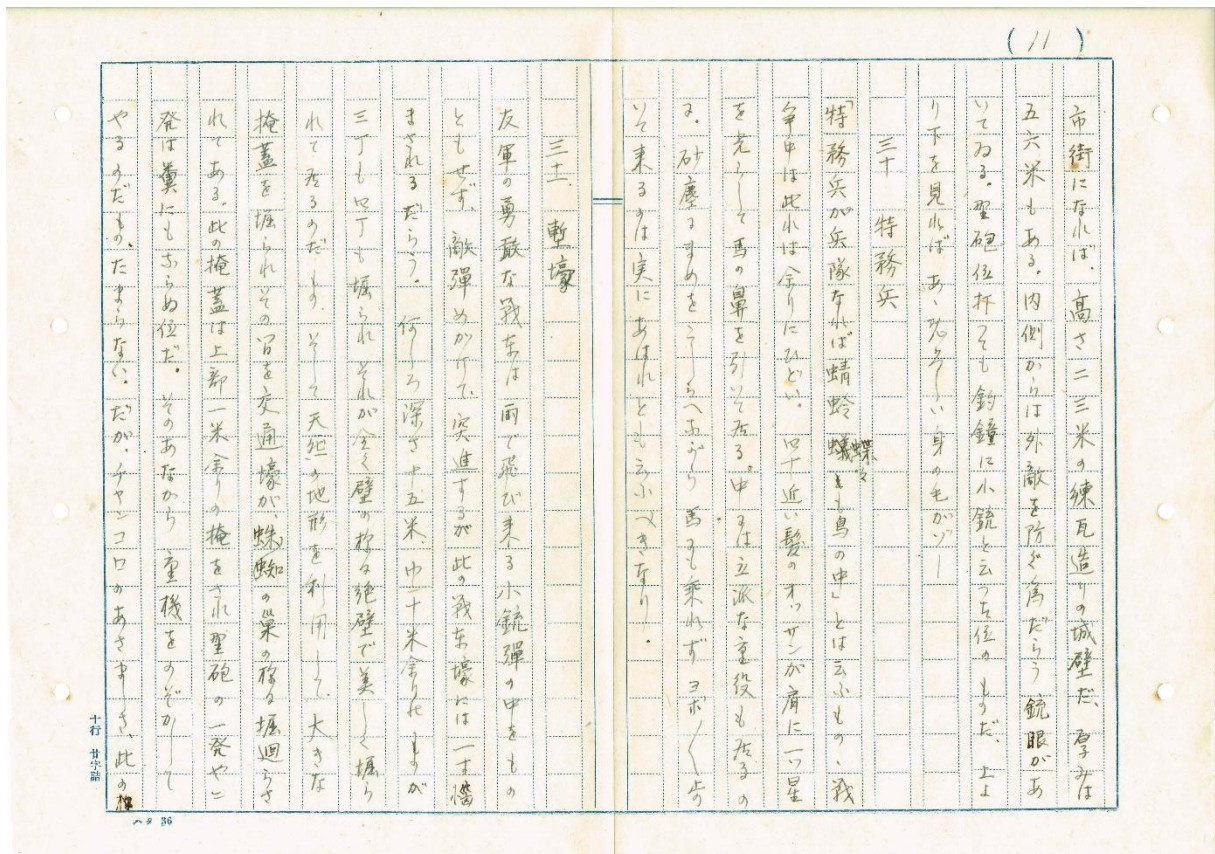
28. 支那人の日の丸

日本軍が一部落に入れば、各家毎に掲げた日の丸!! それは子供の手工の様に半紙に赤い紙を丸く切ってはりつけたもの。横に「大日本軍歓迎」と書いてある。高梁^{こうりやん}の幹にくっつけて出して居るのは、何だか嬉しい。日本軍が通ればその旗を打振って、バンザイ、バンザイ。又、彼等^そに取っては、此れが一つの御守様だ。これがなければ、とんだ災難^{ちよつと}が受ける事があるから。

【阪野吉平「生き残った元日本兵 戦争証言 110」新風舎文庫版 358 頁に収録されている、昭和 17 年から終戦まで山西省で従軍していた兵士の回想の中に、部落民が逃げた後で徴発に入ると「どの家の筆箆にも日本、八路軍、国民軍、英、蘭の国旗が必ずあった。部落へ来る兵隊の旗を振って歓迎する…(一部省略)…生きていく知恵だな」とある。】

29. 城壁と交通

支那の街、日本の街!! 此れは面白い差がある。日本にて一寸^{ちよつと}した街なれば電車、バス、ハイヤー等、交通の便がある。だが、人口何十万といふ大都市でも、支那街の交通は全く^{「0」}ジェロだ。その代り、支那には人口百人足る足らずの部落でも必ず城壁がある。此れは警察の手が短い為だ。こう一寸^{ちよつと}した



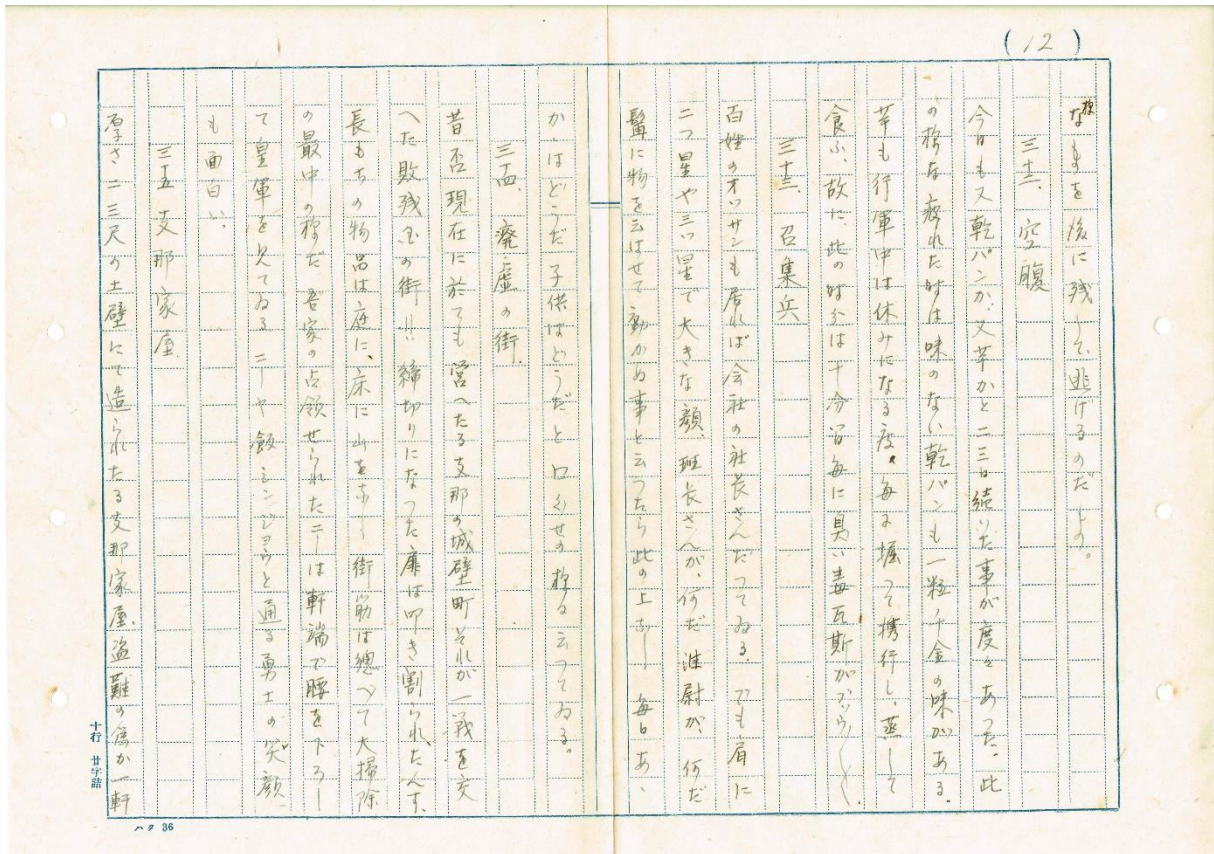
市街になれば、高さ^{れんが}2・3米の煉瓦造りの城壁だ。厚みは5・6^m米もある。内側からは外敵を防ぐ為だらう、銃眼が^いあいてゐる。野砲位打っても、釣鐘に小銃と云った位のものだ。上より下を見れば、あゝ恐ろしい、身の毛がゾー。

30. 特務兵【兵糧、被服、武器、弾薬などの軍需品（^{しちよう}輜重）の輸送を担当する兵】

「特務兵が兵隊なれば、蜻蛉、蝶々^{うち}も鳥の中」とは云ふものゝ、戦争中は此れは余りにひどい。
40【オ】近い髪のオッサンが肩に一ツ星【二等兵の印】を光らして馬の鼻を引いて居る。中には立派な重役も居るのに。砂塵に、まめをこしらへながら、馬にも乗れずヨボヨボ歩いて来るのは、実にあはれとも云ふべきなり。

31. 塹壕

友軍の勇敢な戦闘は雨で飛び来る小銃弾の中をものともせず、敵弾めがけて突進するが、此の戦闘壕^{ちよつと}には一寸悩まされるだらう。何しろ深さ^m15米、巾^m10米余り長ものが、3丁も4丁【≒3~400m】も掘られ、それが全く壁の様な絶壁で美しく掘られて居るのだもの。そして天然の地形を利用して、大きな^{えんが}掩蓋^{おおい}【^{えんが}掩（※天井）がついている塹壕】を掘られ、その間を交通壕が蜘蛛の巣の様に掘巡らされてある。此の掩蓋は上部^m1米余りの^{おおい}掩をされ、野砲の1発や2発は糞にもならぬ位だ。そのあなから重機【=重機関銃】をのぞかしてやるのだもの、たまらない。だが、チャンコロのあさましさ、此の様



なものを後に残して、逃げるのなもの。

32. 空腹

今日も又乾パンか、又芋かと、2・3日続いた事が度々あった。此の様な疲れた時は、味の無い乾パンも一粒千金の味がある。芋も行軍中は休みになる度毎に掘って携行し、蒸して食ふ。故に此の時は10分間毎に臭い毒瓦斯^{ガス}がブゥブゥブゥ。

33. 召集兵

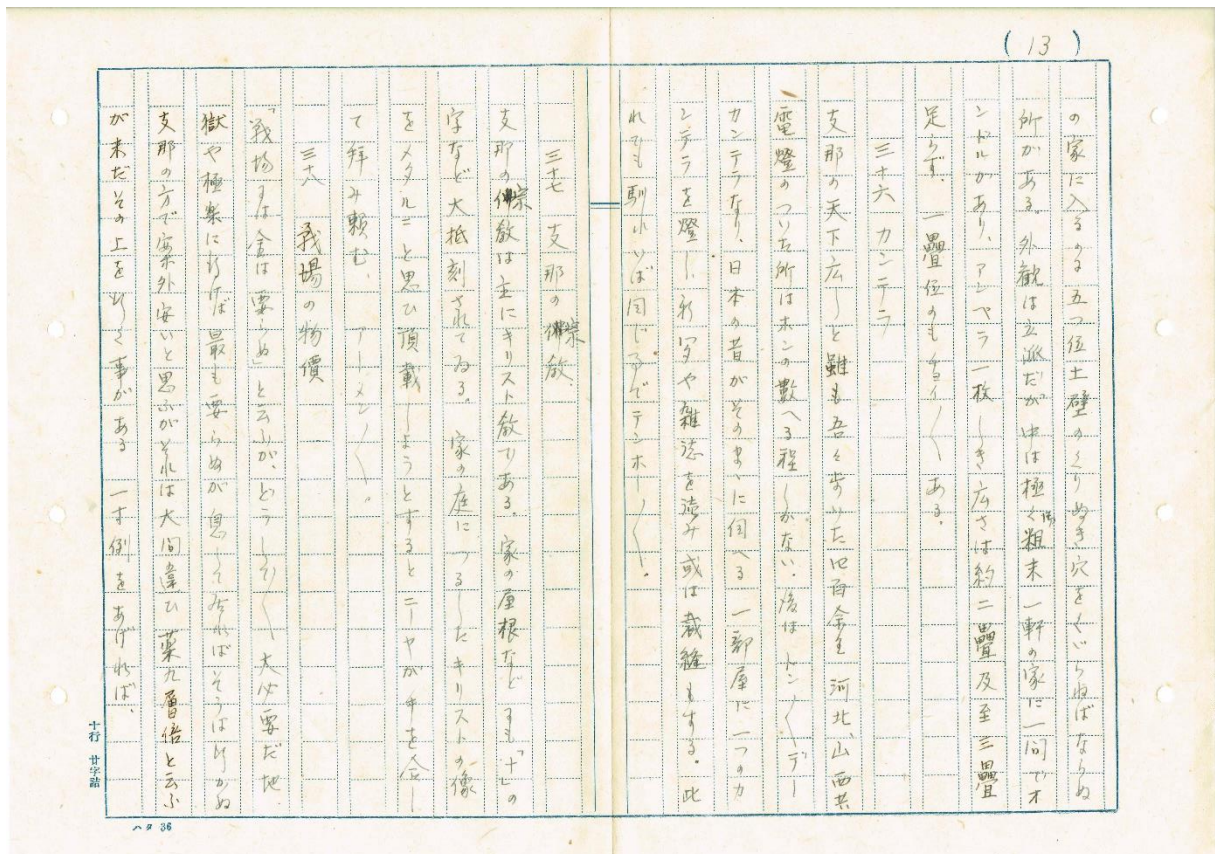
百姓のオッサンも居れば会社の社長さんだ^いってゐる。でも肩に2ツ星【1等兵】や3ツ星【上等兵】で大きな顔、班長さんが何だ、准尉が何だ、髭に物を云はせて動かぬ事と云ったら此の上なし。毎日、あゝ、かゝ【=妻】はどうだ、子供はどうだと口癖の様に云ってゐる。

34. 廃墟の街

昔、否、現在の於ても営へたる支那の城壁町、それが一戦を交へた敗戦国の街!! 締切りになった扉は叩き割られ、たんす、長もちの物品は庭に、床に、山をなし、街筋は總べて大掃除^すの最中の様だ。【日本軍兵士の宿営のために】吾家の占領せられたニーは軒端で腰を下ろして皇軍を見てゐる。ニーヤ、飯シンジョウ【飯を頂戴】と通る勇士の笑顔も面白い。

35. 支那家屋

厚さ2・3尺の土壁にて造られたる支那家屋、盗難【予防】の為か、1軒



の家に入るのに5つ位、土壁のくりぬき穴をくぐらねばならぬ所がある。外観は立派だが、中は極く御粗末、1軒の家に1門でオンドルがあり、アンペラ【Eの日記10頁参照】1枚しき、広さは約2畳ないし3畳足らず、1畳位のもチョイチョイある。

36. カンテラ

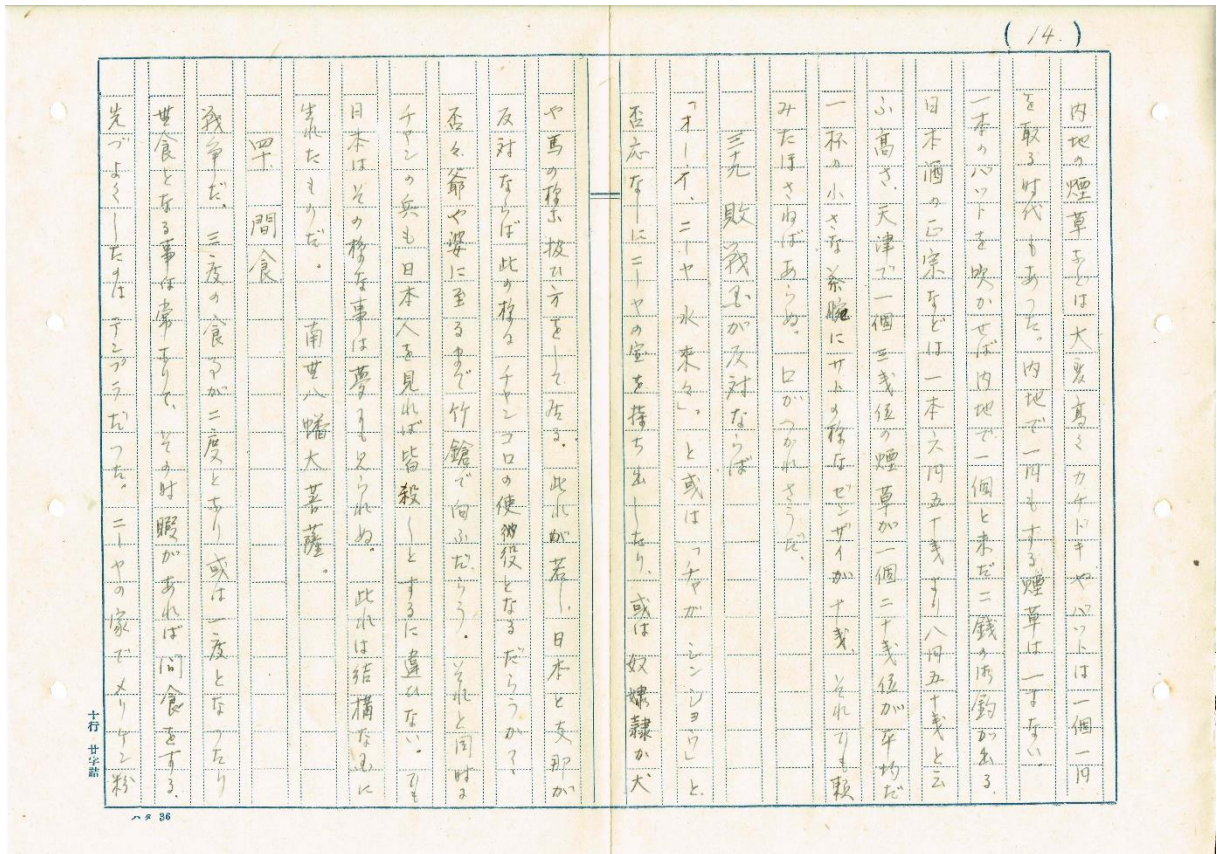
支那の天下広しと雖^{いへど}も、吾々歩いた4百余里【1,500km以上】、河北、山西共、電燈のついた所はホンの数^数へる程しかない。後はトントンデーカンテラなり。日本の昔がそのまゝに伺へる。1部屋に1つのカンテラを燈^{とも}し、新聞や雑誌を読み、或は裁縫もする。此れでも馴れゝば同じ事でテンホーテンホー。

37. 支那の宗教

支那の宗教は主にキリスト教である。家の屋根などにも「十」の字など、大抵刻されてある^い。家の庭につるしたキリストの像をメダルにと思ひ、頂戴しようとする、ニーヤが手を合して拝み頼む。アーメンアーメン。

38. 戦場の物價^価

「戦場には金は要らぬ」と云ふが、どうしてどうして、大必要だ。地獄や極楽に行けば最も要らぬが、息【を】して居ればそうは行かぬ。支那の方で案外安いと思ふが、それは大間違ひ。薬九層倍と云ふが、未だその上を行く事がある。一寸例^{ちよつと}をあげれば、



内地の煙草などは大変高く、カチドキやバットは1個1円を取る時代もあった。内地で1円もする煙草は一寸ない。1本のバットを吹かせば、内地で1個と未だ2銭の御釣が出る。日本酒の正宗などは、1本6円50銭位より8円50銭と云ふ高さ、天津で1個3銭位の煙草が1個20銭位が平均だ。1杯の小さな茶碗にサト【ウ】の様なゼンザイが10銭、それでも頼みたほさねばあらぬ。口がつかれさうだ。

39. 敗戦国が反対ならば

「オーイ、ニーヤ、水来々」と、或いは「チャガ、シンジョウ」と、否応なしにニーヤの宝を持ち出したり、或は奴隷か犬や馬の様な扱い方をして居る。此れが若し日本と支那が反対ならば、此の様なチャンコロの使役となるだらうか？ 否々、爺や婆に至るまで竹槍で向ふだらう。それと同時にチャンの兵も日本人を見れば皆殺しとするに違ひない。でも日本はその様な事は夢にも見られぬ。此れは結構な国に生れたものだ。南無八幡大菩薩。

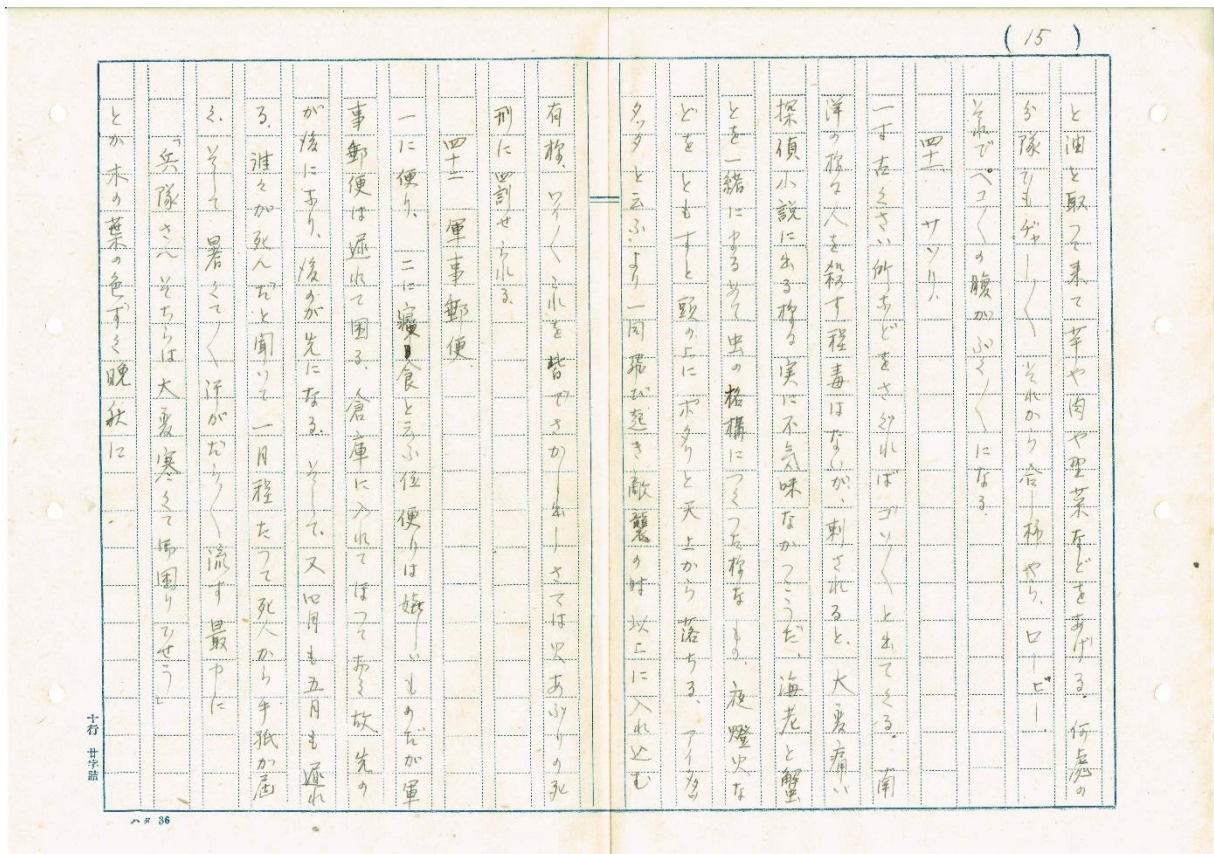
40. 間食

戦争だ。3度の食事が2度となり、或は1度となったり無食となる事は常なりて、その時、暇があれば間食をする。先づ、よくしたのは、テンプラだった。ニーヤの家でメリケン粉

(参考) 「ニーヤ」の鉄道復旧工事の使役



〔歩兵第77連隊の「朝鮮第四十四部隊 支那事變記念写真帳」〕

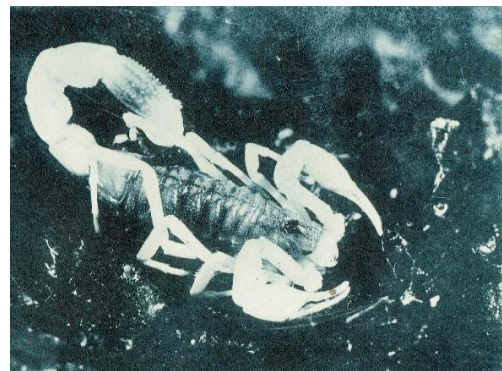


と油と取って来て、芋や肉や野菜などをあげる。何処の分隊でもチャーチャー。それから合し柿やらロービー。それでペコペコの腹がぶくぶくになる。

41. サソリ

一寸古くさい所などをさぐればゴソゴソと出てくる。南洋の様な人を殺す程、毒はないが、刺されると、大変痛い。探偵小説に出る様な、実に無気味なかつこうだ。海老と蟹とを一緒にまるめて虫の格好につくった様なもの。夜、燈火などをとすると、頭の上にポタリと天井から落ちる。アイタタタタと云ふより一同飛び起き、敵襲の時以上に入れ込む有様。ワイワイこれを皆でさがし出し、さては火あぶりの死刑に罰せられる。

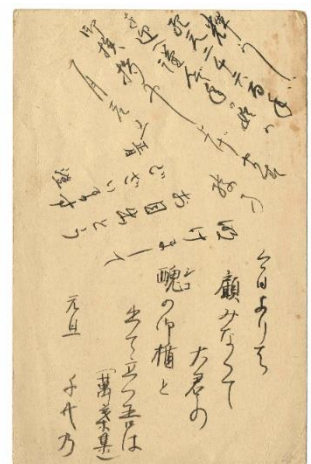
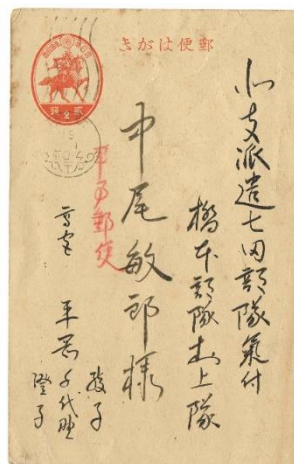
(参考) 中国のサソリ

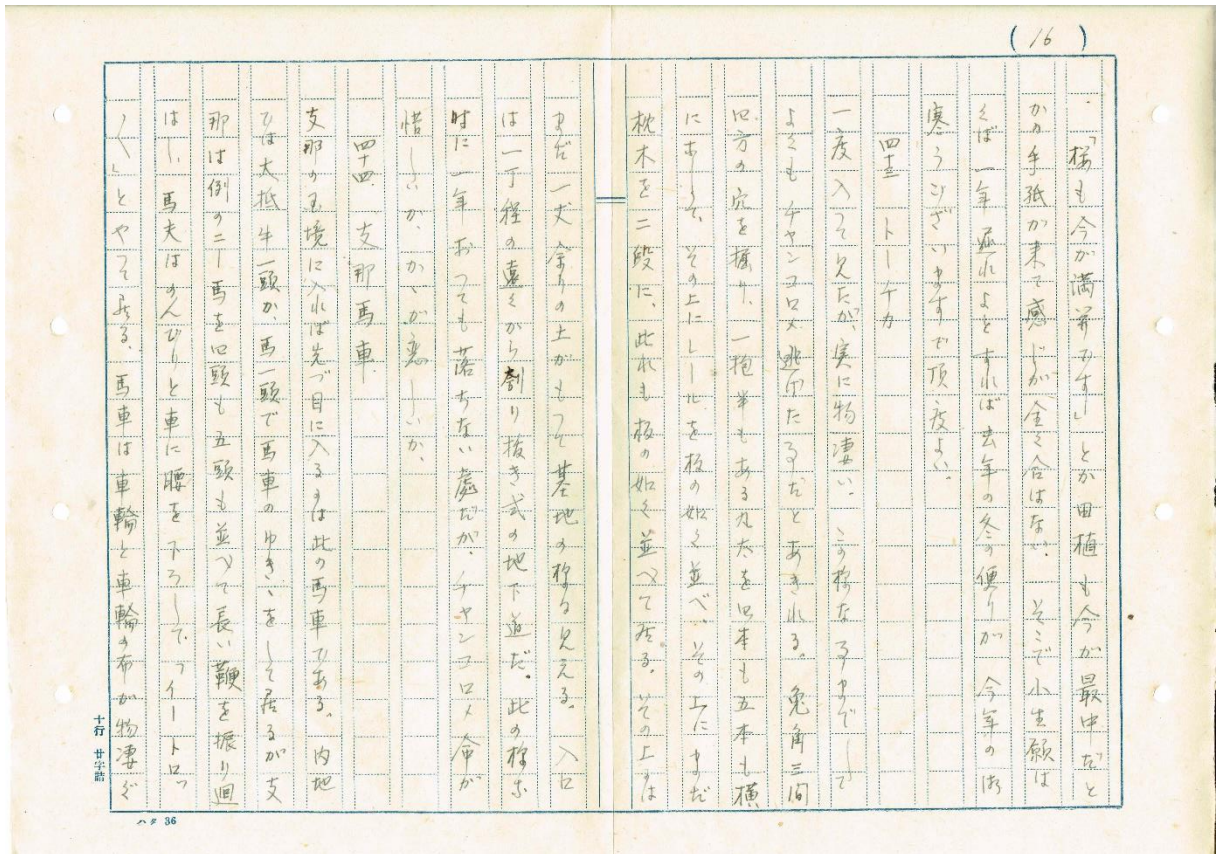


【歩兵第77連隊の「朝鮮第四十四部隊 支那事變記念写真帳」】

42. 軍事郵便

1に便り、2に寝食と云ふ位、便りは嬉しいものだが、軍事郵便は遅れて困る。倉庫に入れてほっておく故、先のが後になり、後のが先になる。そして又、4月も5月も遅れる。誰々が死んだと聞いて、1月程たつて死人から手紙が届く。そして暑くて暑くて汗がだらだら流す最中に「兵隊さん、そちらは大変寒くて御困りでせう」とか、木の葉の色づく晩秋に





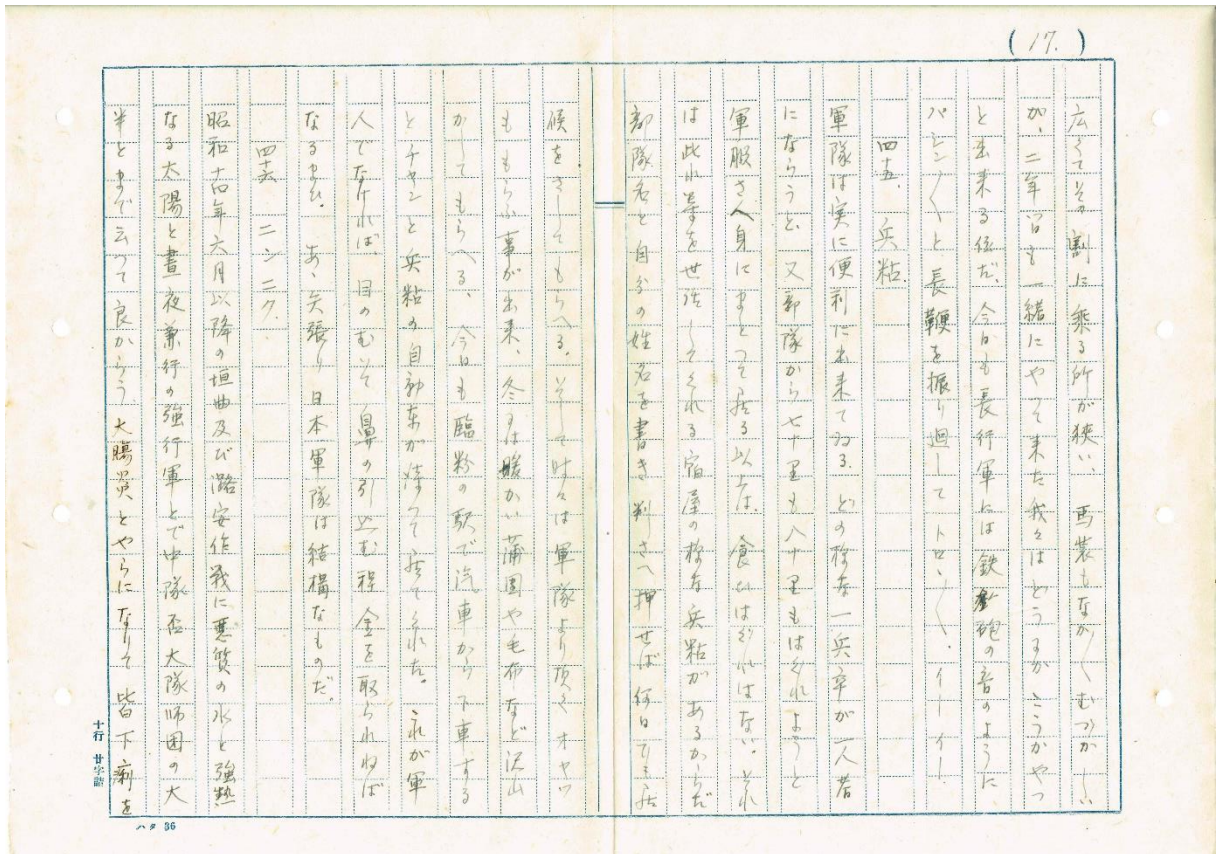
「桜も今が満開です」とか、田植も今が最中だとかの手紙が来て、感じが全然合はない。そこで小生、願はくば、1年遅れよとすれば、去年の冬の便りが、今年のお寒うございますで、丁度良い。

4 3. トーチカ

【1938年10月4日に】一度入って見たが、実に物凄い。この様な事までして、よくもチャンコロメ、逃げたる事だとあきれる。^{とにかく}兎角、3間【≒5~6m】四方の穴を掘り、一抱半もある丸太を4本も5本も横になして、その上にレールを板の如く並べ、その上にまだ枕木を2段に、此れも板の如く並べて居る。その上には、まだ1丈【≒3m】余りの土がもって、基地の様に見える。入口は1丁【≒100m】程の遠くから^く削り抜き式の地下道だ。此の様な時に1年おっても落ちない^処だが、【逃げたのは】チャンコロメ、命が惜しいか、かゝが恋しいか。

4 4. 支那馬車

支那の国境に入れば、先ず目に入るのは此の馬車である。内地では大抵、牛1頭か、馬1頭で馬車のゆきゝをして居るが、支那は例のニー馬【中国馬】を4頭も5頭も並べて、長い鞭を振り廻はし、馬夫はのんびりと車に腰を下ろして「イートロツ、イートロツ」とやって居る。馬車は車輪と車輪の巾が物凄く



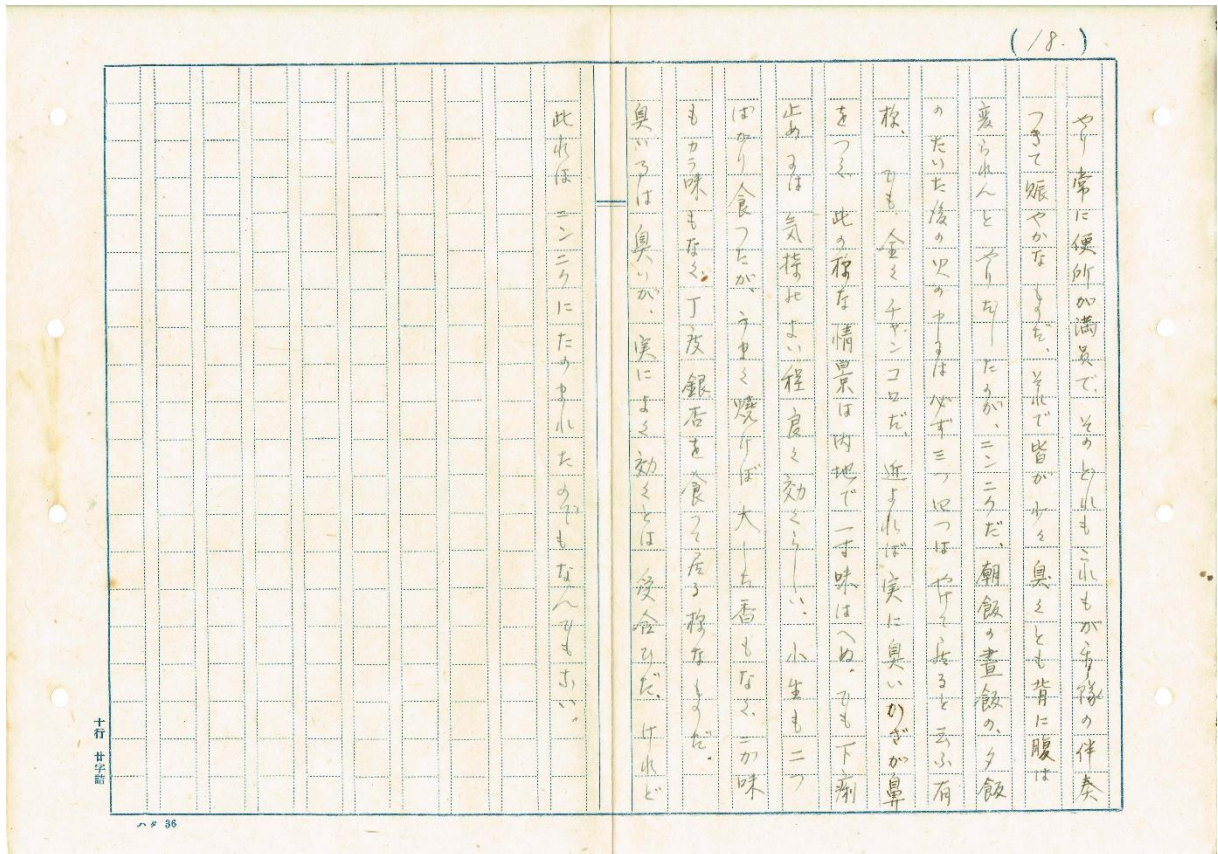
広くて、その割に乗る所が狭い。馬装【馬操？】もなかなかむづかしいが、2年間も一緒にやって来た我々は、どうにかこうか、やっと出来る位だ。今日も長行軍には鉄砲の音のようにパシンパンと、長鞭を振り廻してトロトロ【徴発した馬車を兵站輸送に使っている？】。

45. 兵站

軍隊は実に便利に出来てゐる。どの様な一兵卒が一人者にならうと、又、部隊から70里【≒274km】も80里【≒314km】もはぐれようと、軍服さへ身にまとして居る以上は、食ひはぐれはない。それは、此れ等を世話してくれる宿屋の様な兵^{へいたん}站があるからだ。部隊名と自分の姓名を書き、判^{いそうろう}さへ押せば、何日でも居^え候をさしてもらへる。そして時々は軍隊より頂くオヤツももらふ事が出来、冬には暖かい蒲^{たん}團や毛布など沢山かしてもらへる。今日も【1938年3月27日のことか？】臨^{りんふん}汾の駅で汽車から下車すると、チャンと兵站の自動車が待つて居てくれた。これが軍人でなければ、目のむいて鼻の引込む程、金を取られねばなるまひ。あゝ矢張り日本軍隊は結構なものだ。

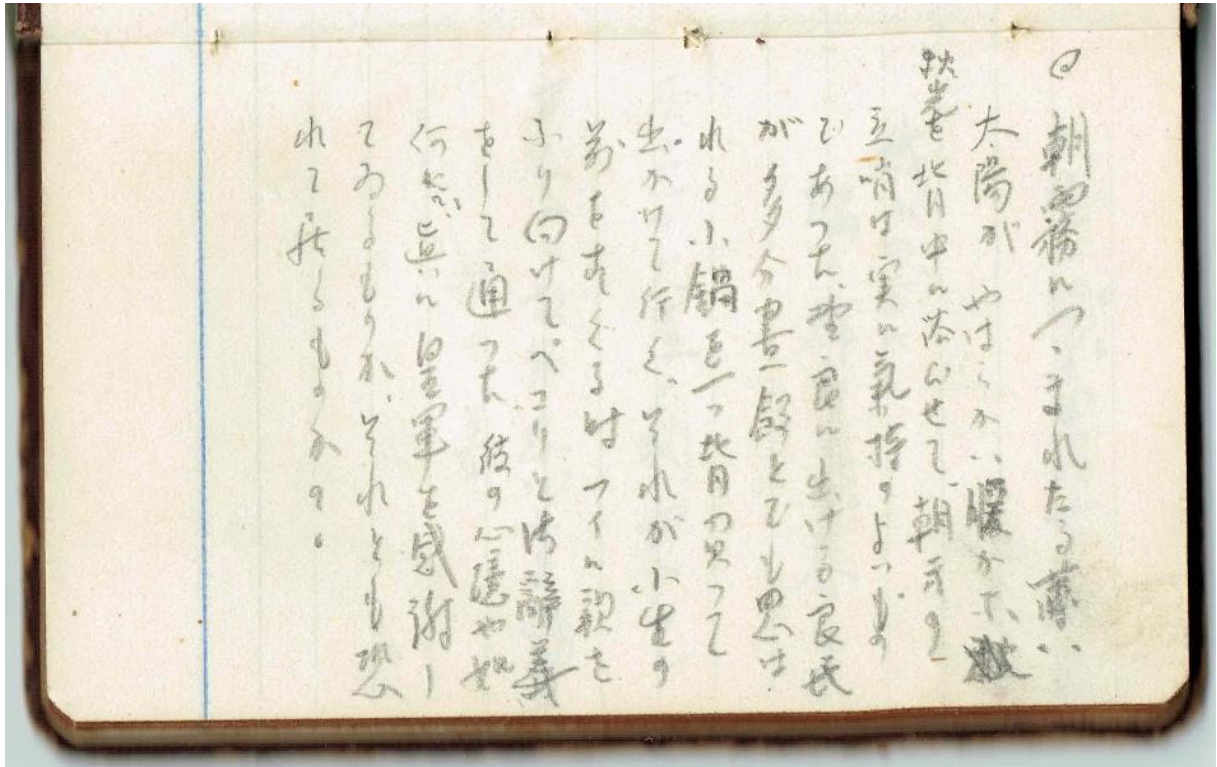
46. ニンニク

昭和14年6月以降の^{えんきよく}垣^{ろあん}曲及び^{るあん}潞安作戦に、悪質の水と強熱なる太陽と、^る晝夜兼行の強行軍とで、中隊、否、大隊・師団の大半とまで云つて良からう、大腸炎とやらになりて、皆下痢を



やり、常に便所が満員で、そのどれもこれもが楽隊の伴奏つきで賑やかなものだ。それで皆が少々臭くとも背に腹は変られんと、やりだしたのがニンニクだ。朝飯の、^昼晝飯の、夕飯のたいた後の火の中には、必ず3つ4つはやけて居ると云ふ有様。でも、全然チャンコロだ。近よれば実に臭い^風かざが鼻をつく。此の様な情景は内地で^{ちょっと}一寸、味はへぬ。でも下痢止めには気持のよい程、良く効くらしい。小生も2つばかり食ったが、うまく焼けば大した香もなく、ニガ味もカラ味もなく、丁度銀杏を食って居る様なものだ。臭い事は臭いが、実によく効くとは請合ひだ。けれど此れは、ニンニクにたのまれたのでもなんでもない。

手帳に書かれた随想



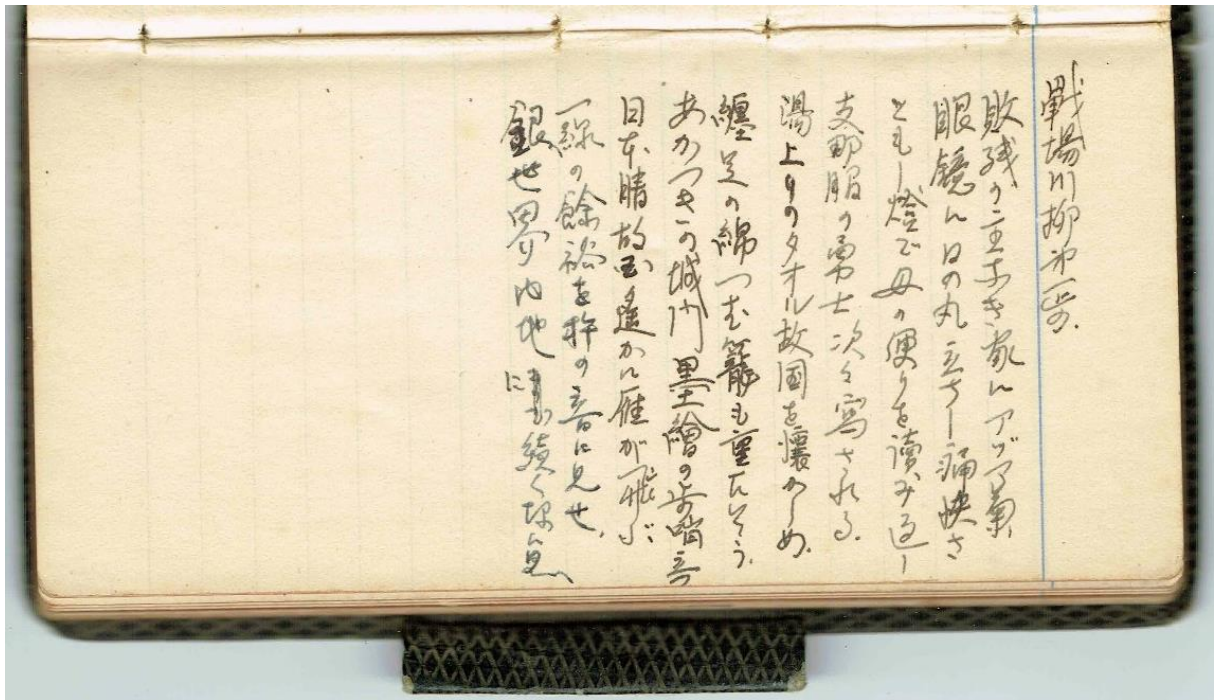
朝霧につままれたる薄い太陽が、やはらかい暖かな秋光を背中に浴びせて、朝方の立哨は実に氣持のよいものであった。

野良に出ける良民【敵対的でない中国人】が、多分晝飯とでも思はれる小鍋を一つ背負って出かけて行く。それが小生の前をすぐる時、フイに顔をふり向けて、ペコリとお辭儀をして通った。

彼の心境や如何に？

真に皇軍を感謝してゐるものか、それとも恐れて居るものか？

手帳の川柳



戦場川柳第1歩

敗残の 主なき家に アヅマ菊【Eの日記の1938年9月18日】

^{がんきょう}眼鏡に 日の丸立ちし 痛快さ

ともし燈で 母の便りを ^読読み返し

支那服の 勇士次々 ^写寫される【写真屋による撮影】

湯上りの タオル故国を 懐かしめ

^{てんそく}纏足の 綿つむ籠も 重たそう

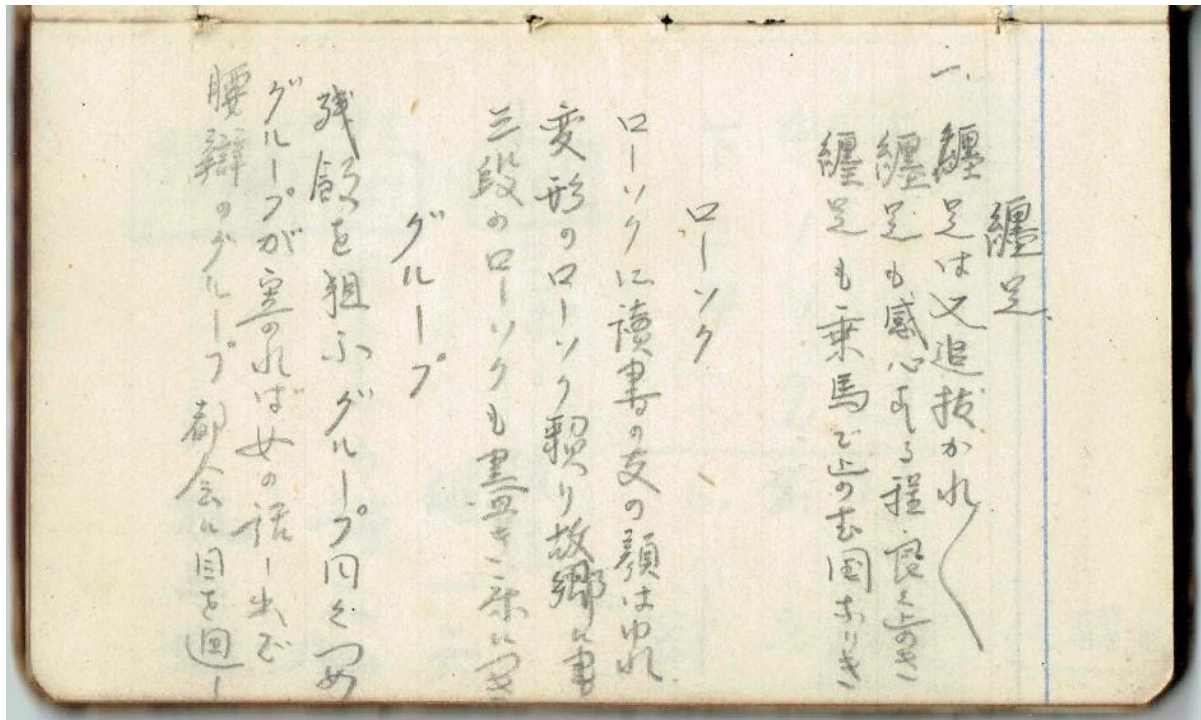
あかつきの 城門^絵墨繪の 歩哨立つ

日本晴 故国遥かに 雁が飛ぶ

一線の ^余餘裕を杵の 音に見せ【正月の餅つき風景】

銀世界 内地に^続續く ように見へ

手帳の川柳（続き）



てんそく
纏足

1. 纏足は 又追抜かれ 追抜かれ
纏足も 感心する程 良く歩き
纏足も 乗馬で歩む 国なりき

ローソク

ローソクに ^読読書の友の 顔はゆれ
変形の ローソク頼り 故郷に書
三段の ローソクも ^尽盡き ^{とこ}床につき

グループ

残飯を 狙ふグループ ^{まる}円くつめ【中国人のことか？】
グループが 寄れば女の 話し出で
^{こしべん}腰 辯の グループ都会に 目を廻し